【雑想】チャングム（7）　皇后の流産・脈診の妙

斉観堂鍼灸・気功治療院　鈴木斉観

『宮廷女官チャングムの誓い』、医女見習いとして宮廷に入ったチャングムが次々と活躍し、先輩医女ヨリの恨みを買うところ。最初の活躍は皇后の脈診であった。

皇后は姙娠していたが、つわりがひどくて食事できず、体調を崩して、終には流産した。流産後も回復が悪く、その時のヨリの脈診は渋（じゅう）脈であった。「川に木が流れていくようだった」と。渋脈は『切脈一葦』（せつみゃくいちい）という古典では「微弱にして粒粒分明ならざる脈」と説明されている。

一般の人は脈を診るというと、脈拍を数えるだけと思っている様だが、東洋医学での脈診はもっと複雑である。診る場所は通常、一般の人が脈拍を数える部位と同じ橈骨（とうこつ）動脈だが、指三本で診る。脈は人によって違うだけでなく、体調によって変化する。

動脈は単なるホースの様なものではなくて、管の壁が緊張したり、弛緩したりする。しかもそれ自身が蠕動する。そうしたことが体調により変化する。また心臓が血液を送り出す力、脈管内の血液量や濃度も、もちろん体調によって変化する。結果として脈は体調に応じて様々な状態を表すわけである。それが東洋医学の古典には整理され記述されている。

渋脈は重病でなくとも、よく見られる脈で、私が表現すれば、「波立ってなく、脈管が棒の様に感じる弱い脈」となる。治療すると、波立った脈になる。良い脈は波立ちがあってスムースに流れる。滑（かつ）脈と言う。波立ちが強過ぎると玉が転がっている様な脈となる。異常な滑脈である。「こんな脈があるのか」という脈で、私は卵巣膿腫の人で初めて診て驚いた。

ところで、皇后を診たチャングムの脈診はヨリと違い、散脈だった。「まるで汁を煮ていると、具の肉が浮かんで来る感じ。しかし、沈んで（※）はいるものの力はありません。いえ、脈が散ります。指に力を入れ圧迫すると、指一杯に溢れた感じ。脈が散ってしまい集まらず、一定しておらず、散漫で根っこがない感じ」と。散脈は倭寇が腸癰でなった蝦遊（かゆう）脈と同じく、極めて危険な状態を示す七死の脈の一つである。

結局、皇后は流産後の単純な鬱症・←血症ではなく、双子の姙娠で一人を死産したが、もう一人は死んでまだ残っている状態だった。お腹はその為に冷えていた。そこで合谷と三陰交に鍼をしていた。

合谷と三陰交は妊婦に対する安産鍼としても用いるツボである。その時は三陰交に気を補う鍼をして下腹の気を補い、合谷からは余分な気を奪う鍼をして、気が上部に偏らないで下部（下腹）に保たれる様にする。皇后への鍼は、これを逆に行って、残っていた死児が出るのを促したと想像される。かくして、鍼の後、しばらくして死児が出て、皇后は回復に向かった。

それにしてもこのドラマを観る限り、韓方（韓国の漢方）は脈診にかなりの重きを置いている。死児がお腹に残っていると疑うならば、なぜもっとしっかりと腹診しないのかが不思議であった。男の医者が女性を診られないことによって、医女制度ができた様に、お腹を他人に見せることに対する感情も日本とは違うのだろう。（2008 年 4 月 23 日）

※　「浮いて」の誤りではないか。

参考：『韓国ドラマ・ガイド　宮廷女官チャングムの誓い』（日本放送出版協会）